

ご隠居・伊能忠敬

第2回

郷土史研究会会員

二子石 三喜男

(草部出身 熊本市在住)

17年間10次にわたる伊能忠敬測量隊の 測量の道筋と距離並びに関連事項

第1次測量 1800年(寛政12) 閏4月江戸を出立し、奥州街道と蝦夷地東岸の地上の距離や星の高さを測る。
(測量距離 3,225km)
この時100両の費用と機材代金70両の合計170両かかったが、幕府の支援は22両。忠敬は約150両(現在の金額で約2,300万円)を自己負担した。
(測量隊員6名 期間180日間)



幕府の公用測量であることを示した御用の旗と筆者(於 伊能忠敬記念館)

第2次測量 1801年(享和元) 伊豆から本州東北地方の東海岸と奥州街道を測る。
この時から歩測だけでは誤差が大きいことから、間縄けんなわも引っ張って測るようになった。
この結果、緯度1度の距離を28,2里(110,85km)と算出した。
(測量距離 3,122km) (測量隊員6名 期間230日間)



測量に持参した組み立て式の中象限儀。重さ約90kg、運搬には分解しても馬2頭が必要であったといわれている。

第3次測量 1802年(享和2) 東北の日本海側の街道と越後の街道を測量。この3次測量から幕府の公用扱いとなり旅の費用と荷物運搬の人馬の費用などは幕府負担となる。
(測量距離 1,701km) (測量隊員7名 期間132日間)

第4次測量 1803年(享和3) 東海道から北陸道筋、佐渡ヶ島を測量
(測量距離 2,177km) (測量隊員8名 期間219日間)
翌年の1804年(文化元) 8月第1次から4次までの測量結果を小図1枚、中図3枚、大図69枚の日本東半部沿海地図として幕府に上呈。提出した地図は幕閣に大変好評であった。この結果、忠敬は恩師高橋至時がこの地図上呈前に41歳の若さで結核を患って他界していたことから、これが測量を止める潮時と考えた。しかし、幕府の若年寄堀田撰津守は11代将軍徳川家斉に江戸城大広間でこの地図を上覧し、将軍をして「見事な出来栄じゃ、これならば西国の地図も作ってみてはどうか?」と言わせた。これにより、忠敬は小普請組せつのかみの役人に登用され天文方の勤務を命じられた。幕府の正式な役人となった忠敬は、これ以後一段と測量に情熱を注ぐこととなった。



杖の先に取りつけた方位磁石(羅針盤)

第5次測量 1805年(文化2) 西国筋一円を測量せよ、との命令が発せられたことから、紀伊半島、山陽道、山陰道筋と隠岐島などを約3年にわたり測量。
(測量距離 6,993km) (測量隊員18名 期間640日間)

第6次測量 1808年(文化5) 四国全域、淡路島、近畿一円、東海道筋を測量
(測量距離 4,568km) (測量隊員16名 期間377日間)

次号につづく